書　　評

上田耕三・小林和正・大友篤著『アジア人口学入門』

アジア経済研究所，1978年，B 6判，ix+227ページ

発展途上国では各種の人口統計が十分に整備されていないことが多く，しばしば，限定された内容の統計資料しか利用できないこと，また，たとえ利用できても精度の点で問題があって，多くの場合，公表されている数字の示すものがそのまま現実の姿を示していないこと，は周知のところである．

本書は，アジア諸国——その大部分は発展途上国である——の「人口統計の利用上の問題点に留意しながら，それらの国の人口の現状を正しく把握するのに必要な人口分析の方法，すなわち，人口学の基礎的方法およびそれに関連する知識を紹介」(はしがき)し，それを通じて，1970年前後のアジアの人口を概観しようとするもので，アジア諸国に住み，そこで人口研究に従事した経験のある三人の専門家によって分担執筆されている．本書が，「アジアの人口」あるいは「アジアの人口問題」ではなくて，「アジア人口学入門」と題されているのはそのためである．

本書は，Ⅰ章「アジアの多様性と共通性」，Ⅱ章「アジア諸国の人口データ」，Ⅲ章「アジア人口の構造，Ⅳ章「アジア人口の出生と死亡」，Ⅴ章「アジア人口の経済活動状態」，Ⅵ章「アジア人口の都市化と国内移動」，Ⅶ章「アジア諸国の家族計画」．Ⅷ章「アジア人口の将来予測」の８章から構成されていて，「アジア人口学」という表題の趣旨に沿うものは各章にみられるが，それは「アジア諸国の人口データ」の章に特に著しい．ここでは，年齢別の人口データと人口動態統計を例として，その正確性と完全性とにおいてアジア諸国の人口統計がいかに問題を含んでいるかを示し，分析を始めるに先だって，まず統計数字の補正と推定を行って，できるかぎり現実の姿に近づける作業が必要であること，を紹介しているのである．なお，アジア諸国の人口データに含まれる諸問題が，「近代的な社会経済的条件を前提とした統計的観察の方法自体が，アジア地域の大部分を占める伝統的な農山村・放牧社会に住む人びととの生活とうまくかみ合わないことによる点にも注目」(p. 40) する必要があり，「先進諸国で従来開発された方式にこだわらず，各国のいろいろな条件によく合った」(p. 43) 人口データの収集方法を考えることによって，その質的向上がはかられると記されているが，この指摘はまことに卓見と言うべきである．それは，こうした考え方が，データの収集方法のみでなく，人口現象の解釈のための理論あるいは人口対策のうえにも必要なことであるためである．

Ⅲ章以下Ⅵ章まで，人口構造，出生・死亡，経済活動，都市化と人口移動等主要な人口現象について，アジア的特色を概観しているが，ここでも，たとえば「世帯」や「経済活動人口」が伝統的な社会が卓越するアジア諸国において，近代社会を前提とした定義にはまりにくいこと，出生・死亡統計の完全性に大きな問題があることなどを指摘したうえで，Ⅰ章で展開されたアジアの共通性にもとづく人口現象が概観されていて，他書ではみられない特色となっている．ただむおしむらくは，同じくⅠ章で展開されたアジアの多様性を，人口現象の多様性のなかで浮きぼりにする点では成功していない．各種統計の整備の不十分さという条件のもとで，それを要求するのが無理なことであると言うべきであろうが．

ところが，Ⅶ章の「アジア諸国の家族計画」では，共通性と多様性，近代的社会を前提とする人口対策の伝統的社会への応用の際に生じた問題点と応用の方法，がみごとに浮きぼりにされ，きわめてダイナミックな内容となっていて，著者の深い見識がうかがわれる章となっている．

インド，タイなど発展途上国に長期間滞在して，貧困と飢えに悩む人々の苦しみを肌で感じ取った三人の著者でなければ，こうした内容の書物の実現は不可能であったと言ってよい．(河邊宏)